SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

ここにしかない空気の中で((2)本年度の教師おこし委員会の取り組みの重点)(研究の基盤となるもの：教師おこし委員会より)(IV 教師おこし編)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2008-01-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小林, 正宣
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000099

ここにしかない空気の中で

2年1組　小　林　正　宣

「こばちゃんね……」。休日、息子と娘と風呂で話をしている時、私の口からふと洩れた言葉に、娘は怪訝そうな顔つきで「こばちゃんって誰？」と首を傾げた。私は思わずはっとした。「こばちゃん」は、私のやんちゃるモンチャ（2年1組の学級名）の中での愛称（呼び名？）だ。私自身も「先生はね、私はね、僕はね」とは言わず、「こばちゃんはね」と話している。子どもが自分のことを「○○ちゃんね」と言うようで、四十近い男が「こばちゃんね」もないものだと思う。が、私は、やんちゃるモンチャの中では、こばちゃんでいる。演じるのでもなく、媚びるのでもなく、ごくごく自然に当たり前のように、やんちゃるモンチャの子どもたちとの空気の中で、私は「こばちゃん」でいる。

1．やんちゃるモンチャ

私にとって12年ぶりの1年担任。高学年を担任することの多かった私にとって、このやんちゃるモンチャの子どもたちとの出会いは、実に新鮮だった。じっとなんかしていない。自分の興味がそそられるものや、好奇心がくすぐられることがあれば、授業そっちのけで飛び付いてしまう。いやはや何とも笑ってばかりもいられない。毎日毎日、体も心も疲労困ぱい、くたくたの毎日が続いた。

そんなある日、給食を食べていると、突然、運動場のスプリンクラーが作動した。真っ先に反応したのは案の定K男君。いきなり机の上に立ち、「あれ何だ？」と叫ぶ。私の中のいたずら心がむずむず動き、「ああ、運動場の下の鯨が潮を吹いたんだよ」と答えた。「鯨？」言うが速いかK男君は上靴のまま運動場に飛び出した。他の子どもたちも後に続く。「やれやれ」と私も後を追った。「本当だ。この水、ちょっとしょっぱい」。私もぷっと吹き出して舐めてみた。「うん？しょっぱいな」。いつのまにやらK男君は砂場からスコップを持ってきて「鯨～！出てこ～い」と運動場を掘り始めた。「鯨だ、鯨だ」と大騒ぎする子どもたちに私はやっぱり大笑いした。

その日の夜、私は研究室でこのクラスに名前を付けた。「やんちゃるモンチャ」。NHKの教育番組「おかあさんといっしょ」に出てくるキャラクターの名前だ。まさにこの子どもたちにぴったりだ。興味が湧くままに、好奇心の赴くままに、いつも何かに心を動かす人であってほしいという、願いも込めた学級名。その実、それは、そう在りたいと自身に願っていたのかと今思う。

2．寝ていた子が起きた

やんちゃるモンチャとの営みで、思わずどきっとする場面に出くわすことがある。自分とは違う異質なものとの出会いに驚き、揺さぶられ、自分を見つめ直すことはこれまでにも数限りなくあったことだ。それなくして今の自分もない。だが、やんちゃるモンチャとのそれは、こうした感覚とは違うと感じていた。

運動会の徒競走の練習の時だ。「よーいドン」で走り始めたF男君は、ゴール直前で脚を止め、その場でぴょんぴょんと跳ね始めた。「何をしているのだろう」と不思議に思いながらも私は「次の子が走るから戻っておいで」と声をかけた。F男君は、はっと振り向き、何やらぶつぶつと言いながらスタート位置へと戻ってくる。その日のF男君の日記を読んでどきっとした。「きょう、かけっこのとき、ぼくはもうすこしでジャムパンがたべられそうだったのに、こばちゃんが『もどってこい』といったからジャムパンがきえちゃった。どうしてくれるんだよう」。やられたな、と思った。

駿府公園でお弁当を食べている時、R男君が四つんばいになって駆け寄ってきた。「ライオンさんはね、昼間寝て夜起きるんだよ。僕はね、昼間起きて夜寝るんだよ。逆さまだね。でも、僕は昨日夜遅くまで起きていたから、ライオンさんになっちゃったんだよ」と言い、また四つんばいになって芝生の上を駆け回り始めた。心がふるえた。勝手に涙がこぼれた。それは、自分の中にある「子どもの感覚」が呼び覚まされた瞬間だった。やんちゃるモンチャの空気の中で寝ていた子は起きた。

3．桜の花が舞う中で……

次の年、私はやんちゃるモンチャの子どもたちと共に2年生になった。すっかりやんちゃるモンチャが板に付いた子どもたちにさらにたくましくなってほしいと「ウルトラやんちゃるモンチャ」を学級名に掲げリスタートしてまもない頃、駿府公園に花見弁当としゃれこんだ。

桜の花びらが風に舞う中、それぞれが気の合う仲間と芝生に腰掛けお弁当を広げていると、その輪のまん中でD子さんが一人立っていた。お弁当を手に持ったまま涙を流している。友達と喧嘩したらしい。私は、じっとD子さんを見つめていた。やがて、D子さんと仲のよい数人の子どもたちが声を掛けにいくが、D子さんは動かない。そのまま十数分が経った。D子さんは立ちつくしたまま泣いている。それでも、私は腰を上げなかった。

すると、私の所に一人の初老の男性が声を掛けてきた。「あんた、先生かい？あの子、ずっとああやって泣いているじゃないか。何とかしてあげなさいよ。可哀相じゃないか」。すぐ傍のベンチでD子さんの様子を見ていていたたまれなくなったのだろう。「なぜ、教師なのに何もしないんだ」。言葉になくとも表情はそう訴えている。私は、「気に掛けていただきありがとうございます。でも、あの子は大丈夫です。自分から動き出すはずです。私は、それを待っているのです」と丁重に答えた。

十数分も一人立ちつくし泣いている子を見て辛くないはずがない。切ない。駆け寄って「どうしたの？」と声を掛けたい。そんな衝動は何度も何度も突き上げてくる。これが去年の今頃だったら、とうに声をかけていただろう。でも、D子さんは去年のD子さんじゃない。これまでの1年間の営みの中で、涙の数だけ強くなったD子さんを感じていたからこそ、自分で動くことを信じていた。それは、他のやんちゃるモンチャの子どもたちとて同じ思いだろう。子どもたちもD子さんが動くのを待っているのだ。春の陽気と舞う桜とは裏腹に、ぴんと張り詰めた空気が私たちの中にだけ漂っていた。

やがてD子さんは泣きながら歩き始めた。普段仲のよい友達の所ではなく、G子さんがいるグループの所へ。G子さんはこの春転入してきた子で、今引っ張りだこになっている子だ。それ故のトラブルがあったのだろう。D子さんはG子さんの傍にぺたりと腰を下ろし、涙でしょっぱい味のお弁当を食べ始めた。私も弁当を口にした。子どもたちの箸も動き始めた。安堵とともに穏やかな春の風が、また、やんちゃるモンチャの空気の中に舞い込んできた。

しばらくして、弁当をたいらげた私は、D子さんに「お弁当はおいしいかい？」と声をかけた。「うん、おいしいよ」。D子さんはすっかり笑顔でそう答えた。これだけで十分だった。

4．喜怒哀楽

時折、中学生になった教え子たちが私の研究室にふらりとやって来る。大した用事もないからとりとめもなく話をして帰っていく。そんな中、「こば、まさか低学年の子にも私っちにみたいに怒鳴っているんじゃないでしょうね」と言われた。まったく生意気なことを言う。「うん、そうだなあ」とぼそっと答えたが、実際には、彼女らとの営みの時より、今私は喜怒哀楽が激しいと自覚していた。

U男君の転校を目前に控え、カヌーづくりは急ピッチで進められていた。「このままでは間に合わない」「U男君を何とかカヌーに乗せたい」と私はかなり焦っていた。焦りは、そのままストレートに感情となって子どもたちにも向けられた。「何をしてるんだ。遊んでる暇なんかないだろ！」「もっときつく針金で止めなきゃ駄目じゃないか！」。私の大声が響くたびに、さすがのやんちゃるモンチャたちも作業する手を止め、肩をすぼめた。

その光景をたまたま学級役員さんが見ていた。いくつかの相談話を終えると、H男君の母親は「今日の先生は恐いですよ」と言った。はっとしてばつが悪そうに「いやあ、カヌーづくりがなかなか進まなくて……」と答えると、「それにしても恐いですよ。私も近寄れなかったくらいですから」と、

真顔で言った。（そういわれて見ればそうだな。ちょっと行き過ぎだな）内心そう思った時、隣にいたB男君の母親から「こばちゃんは先生じゃないのよ。やんちゃるモンチャのがき大将だもん。威張っていたいのよね、こばちゃん」と不意を突かれた。H男君の母親と私は、思わず眼を丸くした。「ははは、がき大将か」と照れ笑いをした私だが、（そんなもんかな）と妙に納得してしまった。

それにしても私はよく怒る。子どもに怒るその度に自戒と反省を繰り返す私だが、やんちゃるモンチャといるとどうしてもテンションが高くなってしまう。「怒」ばかりではない。すぐに感激して涙もよく出る。白熱する授業の真っ只中、思わぬ子どもの発言や表情に思わず一人吹き出し高笑いしてしまう。やんちゃるモンチャの中にいると、私の中から喜怒哀楽という感情がそのまま出てしまう。よく喜び、よく怒り、よく泣き、よく笑う。ありのままの感情、ありのままの自分。それは、まるでやんちゃるモンチャと同じ。

5．わかってほしい、わかっているよ

やんちゃるモンチャの中に、一日に三度は私に怒られる子がいる。K男君。入学式の時から実に華々しいデビューを飾った彼。好奇心の赴くままに、興味のあることにはいつまででも熱中し、気が向かないことは見向きもしない。やんちゃるモンチャの中のやんちゃるモンチャ。

ある日の給食時、あまりの行儀の悪さに、私はK男君に雷を落とした。「僕が何を悪いことしたの」「僕って悪い子？」とでも訴えるように涙の奥の澄んだ瞳で私を見つめる。私は、この瞳に弱い。だから、そっぽを向いて知らん顔をしていた。数分間、彼は世界で一番お行儀のよい子でいる。

しばらくしてB子さんが私の所に来た。そして、私の顔を見て「ねえ、こばちゃん。こばちゃんって本当はK男君のことが好きなんじゃない？」と聞く。私は、B子さんのあまりにも素直な表情に慌てて、「何で？」と聞いた。彼女はちょっとはにかみながら首を振り、「うん？別に。そう思っただけ」と言って席に戻っていった。「この子、わかってるな」と思った。

そう、私はK男君のことが好きだ。身勝手で、一番にならないと気に入らなくて、すぐに泣き、すぐに怒り、ちっとも人の言うことなんか聞かない彼が大好きだ。美術専攻の私より、造形感覚が鋭いところが頭にくるほど好きだ。思えばK男君の名前を私は一日に何度呼ぶだろう。関わりの数は、教室中の誰よりも圧倒的に多い。それをB子さんは感じている。そして、K男君が本当は繊細で、やさしい人間なのだということも感じている。だから、私にそう聞いてきたのだ。でもそれは、「私だって……」と言いたかったに違いない。なのに、わかっているのに、「K男君のこと好きだよ。B子さんのことも大好きだよ」なんて言えない自分。

ある日、蕎麦を植える畑をつくっていた。私が土を耕す横で、子どもたちは土遊びをしていた。遅々として進まない畑仕事だったが、それはそれで楽しかった。やがて音楽の時間になり、子どもたちは教室へ戻っていった。空き時間の私は一人、畑仕事を続けていた。実に仕事がはかどる。音楽の時間が終了し、「こんなに畑が変わって驚くだろうな」と、子どもたちが来るのを待っていた。ところが、ちっとも来やしない。十分待っても、十五分が過ぎても。窓から教室を覗くと、子どもたちは楽しそうに遊んでいる。愕然となった私はドアを開け、「なんで誰も畑に来ないんだ。ずっと待っていたのに。もう、みんなにはお蕎麦を食べさせないからな」と怒鳴った。一瞬教室は静まり返ったが、ふっとW子さんが「こばちゃん、すねてる」と笑った。他の子もつられて笑い出し、B男君は「こばちゃんたらやだね。すねちゃってやだね」と歌い出した。私もつられて笑った。

何事もなかったかのように、子どもたちと蕎麦の種を蒔き、防鳥ネットを張った。「早く大きくなあれ。大きくなっておいしいざるそばになあれ」、屈託のない子どもたちの笑顔に癒される。「わかってほしい、わかっているよ」という無言の空気の中にいる私たち。

6．これでいい、これでいいな

授業参観で行なう「あしたコンサート」。今年は、そのほとんどを子どもたちに任せてみようと考えていた。「去年とは違って劇をやりたい」と、ストーリーや台本、衣裳づくりから劇の練習まで自

分たちで話し合い、計画を立て進めていった。私は、同僚の研究授業の記録をとるため、すっかり劇の練習は子ども任せになっていた。

研究授業本時、やはり自習となった子どもたちは自分たちだけで劇のリハーサルを行なうことになった。授業の後は話し合いもあるため、2時間目が終了した時「これでこばちゃんはいなくなるけど、後は頼むね」と告げた。すると、J子さんが「こばちゃんなんていなくてもいいもん」と言った。「そうそう、いなくていい」とG男君も続いた。売り言葉に買い言葉で、その時は「いいよ、そんじゃあもう帰ってこないからな」と私は答えた。

研究授業が終わった時、私は、ふと子どもたちがリハーサルをしている教室に目を遣った。カーテン越しに子どもたちの姿が見える。私は、こそっとのぞいてみようと、遠回りをして教室に向かった。柱の影から顔を出してのぞいた瞬間、子どもたちの歓声がわあっとあがった。それは、私に気付いたからではなく、主人公のW男君の演技に対してだった。「いいねえ、酔っ払ったウッディーおもしろいよ。本番でもやっちゃえよ」「さっきのやくざもよかったよ。どっちが受けるかなあ」。子どもたちの反応はごくごく自然だった。肩の力を抜き、思うままに演技をし、互いに感じたままを言い合っている。私は、思わず「なんてあったかいんだろう」と思った。このやんちゃるモンチャの教室には、実に穏やかな、ゆったりとした時間と空気が流れている。

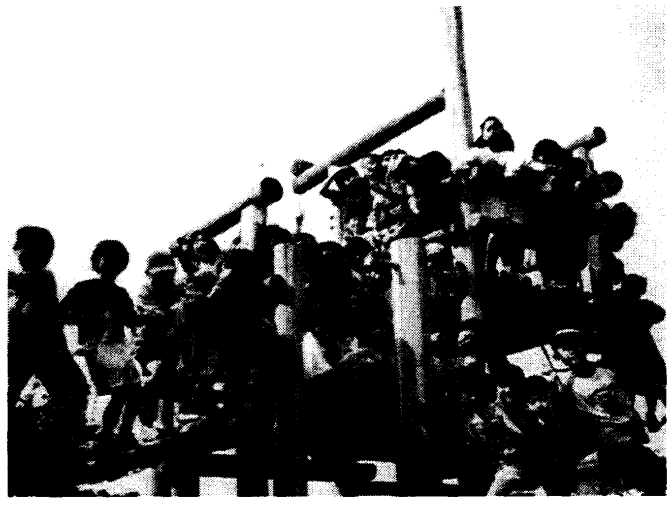
「この子たちは、いつもこうやって練習してきたのだろうか」。劇について話し合っている時、どこか表情を硬くしながら力説していたJ子さんも、床に寝そべり笑い転げている。すると、さっきJ子さんが私に言った「こばちゃんなんていなくてもいいもん」という言葉がわかるような気もしてきた。こうした姿が、私がいる時にはないというわけではない。何と綴っていいのか悩むが、子どもたちが子どもたちでつくる空気の穏やかさに「ああ、こいつら」と心がふるえ、涙が出てきた。

「あっ！こばちゃんだ」思わず駆け寄ってくる子どもたちに、「お前たち、みんな楽しそうだなあ。いい顔してるなあ」と声をかけた。「本当に、こばちゃんはいなくてもいいなあ」と、脚にまとわり付いているJ子さんを見て言うと、彼女はにこっと笑った。

「じゃあ、これで本当にこばちゃんは消えます。後はよろしく」と、足早に話し合いに向かおうとすると、またしても「これで邪魔者はいなくなったぜ」と叫ぶK男君の声。「なんだと！邪魔者だと！」と振り向くと、K男君はにやっと笑い、「今度は、俺がおもしろいバズをやるからな。見ててよ」と、劇の練習を始めた。後から聞こえてくるやんちゃるモンチャの歓声を聞きながら、「もっと、この子たちと一緒にいたいな」と後ろ髪を引かれるような思いをしつつも、「これでいい。これでいいな」と、話し合いに向かった。

子どもたちひとりひとりがその子の息を吐く。教師もその教師の息を吐く。それをひとりひとりが吸い、また吐く。そんな呼吸がずっと繰り返される場所、教室。やがて、その空気は、その学級にしかない空気になっていく。そんな空気……のようなものを子どもと教師とで醸し出す。

私たちは、こうして、やんちゃるモンチャの空気をつくってきた。この空気は、時に張り詰め、時に穏やかに、それをくり返すごとに漂うような、包み込むようなものになってきた。

共に喜び、怒り、泣き、笑う。やんちゃるモンチャの子どもたちと私が、その時その瞬間、かけがえのない今を精一杯生きてきたから、空気は濃密に、味わい深いものになってきたのだ。

この教室の、ここにしかない空気。私は、やんちゃるモンチャの子どもたちと、思い切り深呼吸する。この、ここにしかない空気の中で、私は「こばちゃん」でいることができる。